

種復々

「京漢詩54」を有難う存知します。
詩作品では、工藤様の「冬の樹」家本様の「めぐらの唄」
土岐田様の「倦怠」などには、何よりも詩の根本であるハイタ
リテイがあり、なおかつユーモアがあつて、大層興味深く、今後
かたりに期待されます。しかし、そのものがなせ過ぎます。勿論迷
全体に虫貝誌には迷いというものが決つていますが、何事によらず、
なにとりつものはなかり方がよりに決つていますが、何事によらず、
なせ過ぎるというこの恐れしさを知らなければ、どだい詩
なんて代物は不必要であり、また必要があつたとしても、
この時そこには絶対にならぬものであります。
私は今後とも一切の「日曜詩人」を認めず、減じる詩も信じない
であらゆる時、工に於て詩はあるべきものと断定し、続けよう
とする者です。

草々

種復々

「京漢詩56」を有難う存知します。
「研究会の歩み」に見られる意欲的な活動振りには、
ただただ感服するほかありません。
詩というものが大切にそのものであるかというのを、PRすることの
重要さは、今又何事にもまして虫貝重なお仕事であります。が、
真の和エジー、あるいは本物の詩精神というものは、現代詩と
称されてくるものとは全然別のところに存在するのではないかと、
最近しきりに思われてたありません。
それは少々とも詩壇の虚名やあらゆる売名行為に宿るもの
ではないと断言させていただきます。
従つて、虫貝が虚名かどうかというのを厳重に判定するため
のよい機会を持たれてくることには、大りなる意義があること
申せましよう。

草々

種復々
「京漢詩57」を有難う存知します。
詩壇の虚名やあらゆる売名行為に宿るもの
ではないと断言させていただきます。
従つて、虫貝が虚名かどうかというのを厳重に判定するため
のよい機会を持たれてくることには、大りなる意義があること
申せましよう。

種復々
「京漢詩58」を有難う存知します。
詩壇の虚名やあらゆる売名行為に宿るもの
ではないと断言させていただきます。
従つて、虫貝が虚名かどうかというのを厳重に判定するため
のよい機会を持たれてくることには、大りなる意義があること
申せましよう。

草々